

若者の参加も促す静岡市

「より多くの市民が参加するまちづくり」という目標を掲げたときに考えなければいけないのは、実際に市民活動に参加ができるのはどういう人たちなのかということである。

もちろんすべての人が市民活動に参加することができるのは理想像ではあるが、実際のところ会社勤めをしている人や、仕事をしている母親などが市民活動に参加するのは難しく、地域の自治体やこども会などを担う大人が減っているのも現状もある。

そこで、まずは市民活動に参加ができる層をターゲットにしていくことが必要になる。そこで、私は「若者」の市民活動をより促していくことが必要だと考えている。若者の市民活動を促すことによって得られるメリットは大きく2つある。

第一に、若者が地域の担い手として育っていくことである。石川県金沢市では「学生のまち・金沢」を掲げ、市が学生の市民活動を全面的に支えることをしている。そして、活動に参加する学生は年々増え、学生の市民活動団体の数も増えている。学生が地域でのまちづくりなどの市民活動に参加することで、金沢という地域に対しての「愛着」がわき、県外から来た学生が卒業後も金沢で生活するといった効果も生まれている。

静岡の大学で街中にキャンパスがあるのは、常葉大学の水落キャンパスだけで他の大学はほとんどが郊外にある。学生の活動の拠点はほとんどが大学の中で完結し、私自身が通っている県立大学の学生でさえも、地域に根差した大学を目指しているにも関わらず、地域との接点はほとんどないと実感している。人口流出の進む静岡市だからこそ、若者の市民活動への参加は重要であり、駿府城の再建などが進む中、静岡という地域の歴史などについて若者が知り、静岡に愛着を持ち、静岡のこれからを担っていくために若者の参加を促すことは非常に意味のあることである。

第二に、若者の社会参加促進という観点からである。市民活動への参加は、社会に参加することと同義であると考えている。近年の内閣府から発表されたデータなどを見ると、若者の自己肯定感の低さが指摘されており、大きな社会問題となっている。

地域での市民活動に参加をすることで、学校では身につかない「自主性」や、「主体性」が育まれることが期待され、市民活動に参加するひとりひとりが社会に対して自分の影響を実感することになる。この影響力こそが、自己肯定感につながり社会参加を促していく要因のひとつである。学生時代という社会への移行期である。社会とのつながりを感じることができる市民活動への参加は有用なものであり、長い目で見たときに社会に興味を持つきっかけが、政治参加を促すことにもなると考えられる。若者が市民活動に参加することで、社会参加を促すことになる。

一点目では市内の大学生について言及したが、一点目においても二点目においても高校生世代にも共通していえることであり、幅広い若者の市民活動への参加を促すことが、長期的に考えて「より多くの市民が参加するまちづくり」になるといえる。